

---

# 「ロスト・イン・ハリウッド」

ココナツ・サム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ロスト・イン・ハリウッド」

### 【著者名】

ローナツ・サム

### 【あらすじ】

旅行の終わりにハリウッドに立ち寄ったトオルは、ひょんなことから事件に巻き込まれる。ところが運命のいたずらか、どんどん予測のつかない方向に・・・。トオルはどこに行ってしまうのか?

今日はツイてる。

何の気なしに入つたバーで飛び切りの女と知り合つた。  
歳は二十五くらいかな。金髪で青い目の腰のくびれた女だ。  
おまけに見ろよ、どうだ、店を出て俺についてくるじゃないか。  
ひょつとしたら売春婦なかもしれないが、日本じゃとてもじやないがこんなにいい女とは出会えない。まだ金は残つてゐるし、少しくらいなら払つてもかまわないな。

アメリカを旅して一ヶ月ちょっとになるが、こうなつてみるとハリウッドを最後の滞在地に選んで正解だった。この街には女優とかモデルのタマゴとかがころころしているんだろうが、この女もその一人だろうか。これだけの美人だつたらいつか世の中に出ることだろう。

考えてみたら会社をリストラされて旅行することを思つて二ユーロ一ユーロに降り立つて以来、女つ気が一切なかつたからな。  
もちろん、バックパックを背負つてユースホステルや安宿を泊まり歩いて、移動は夜行バス、髪も髪も伸び放題だつたから女が近寄つてくるはずもない。やつぱり今日床屋で髪を整えてもらつてよかつた。もしかしたら髪がラッキーなのかもしれないから、日本に帰つてもこのまま伸ばしておこうかな。

日本に帰るまであと一週間ある。西海岸の陽気と青い海を楽しんで帰るつもりだつたけど、思つていたより楽しく過ごせそうだ。

その店はハリウッド通りの東側のはずれに近いところ、あと半ブロックくらい行けばフリーウェイという所にあつた。街の真ん中には派手な電飾をつけたバーが何軒もあつたが、そういうところは店に合わせたのか客も派手で、どうも氣後れがした。それに、音楽も

外まで聞こえるぐらぐらした。

そのままふらふらと歩いていたら、割と落ち着いた感じの店を見つけたのでのぞいてみたというわけだ。

古いジャズっぽい音楽が流れて、店の中は木造りだがそれほど高級そうな作りでもない。客層も結構若い奴がいて、ここなら落ち着いて遊べそうだった。

店を出た俺たちは、歩きながら話した。

「ねえ、トオルは何の仕事してるの？」

「いや、普通の会社員だったんだけどリストラされてね。なかなか仕事が見つかなくて、今は失業保険もらってる。日本に帰つたらまた仕事探さなきや。」

「日本人だつたらカラテとかできるの？ 強い？」

「キヤサリン、日本人が皆カラテをやつているわけじゃないんだよ。俺はそつち系はまったくダメだなあ。子供の頃からケンカの時は逃げ回つてた口や。」

「ふうん。でも、日本って綺麗な国なんでしょう？ あたし、一度行つてみたいの。二ンジャとかゲイシャとかサムライとかにも会つてみたい。あ、日本と言えばフジヤマよね。スシ、テンプラ、テリヤキも好き。」

「ああ、俺は二ンジャには会つたことがないけど、ゲイシャになら会えるかもしねーな。でも、多分日本に来たらがっかりするよ。」「どうして？」

「東京はまるで二コ一三一クみたいだからね。」

ハリウッドは華やかなイメージが先行しているが、メインの通りをちょっと外れれば、意外と安い宿がある。

コースホステルばかり渡り歩いてきたが、ここでは結構ゆっくり滞在できるのでモーテルに泊まることにしていた。値段はそれほどかわらない。一週間で400ドルだ。まあ、値段が値段なのでお世辞

にも綺麗とは言えないが、ちゃんとしたベッドとシャワーとトイレがあつて、一応鍵もかかる。シーツも代えてくれる。コースホステルとの差額分の快適さはある。

とは言え、正直なところこんな所に女の子を連れてくるのはちょっと恥ずかしい。でも、こんなことは予想してなかつたんだからじょうがない。

ハリウッド大通りから15分ほど山の方に歩いて俺のモーテルに着いた。途中の酒屋でビールも買った。俺ももうすぐ30歳になるのに、写真つきの身分証明書（ID）を見せろと言われたのには驚いた。さっきのバーでは何も言われなかつたのに。結局キャサリンのIDでビールを買った。

モーテルに帰つて、ビールを飲んで一人でゆっくりした時間を過ごしてのんびりしていた時だ。時計の針はもう一時を回つていたが、突然ドアがノックされた。いや、ノックという表現は正しくない。激しく殴りつけているような音だつた。

同時に叫ぶような声が聞こえた。

「キャサリン、ここにいるのは分かつてゐるんだ！出で来い！ここを開ける！」

「早く開ける！でないと、ドアを叩き破るぞ！」

「お前がここに男としけこんだのは分かつてんだよ…さつさと開けろ…」

おいおい、一体何が起つたというんだ？

「キヤサリン、あれ、誰?」

「あの声はボビーね。ずっとあたしにつきまとつてゐるよ。きっと手下か何かが見てたのね。やばい奴だから氣をつけたほうがいいわ。逃げましょ。」

そういう言つている間にもドアは激しく叩かれている。ドアノブをバルか何かで叩いているようだ。ここつ、本当にドアを破つて入つてくる気だ。信じられない。

「さあ、向こうの窓から! 急いで!」

「ちょっと待つて。ズボンをはくから。」

「ズボンなんてどうでもいいわ。」

よくない。パンツで表を走るわけにはいかないだろう。それじゃ変態だ。

やつとズボンに両足を入れた時、とうとうドアを破られた。

「この野郎! キヤサリンに手を出しちゃがつて!」

ボビーと呼ばれるその男は、言つなり殴りかかつてきた。なるほどこいつはやばそうだ。顔もゴシイが体もゴシイ。こんな奴に殴られたら一瞬での世行きだ。

「ひやーっ!」

俺は変な声を出しながらとりあえず立ち上がり避けてみた。が、しまつた! ズボンを半分しかはいてないから、ちゃんと立ち上がれない。

転んだ俺は、自然とボビーの足元に倒れこんだ。

「うわっ!」

足元を払われた形になつたボビーは前のめりになり、テレビの方に倒れた。

鈍い音がした。テレビ台に思い切りぶつかつたらしい。やばいよ、これで発狂しなければいいけど。

あれ？こいつ、動かないぞ。

「今のうちよ。早く逃げましょ。」

「ちょっと待つて。こいつ、動かないよ。それに血が出てる。頭でもぶつけたんじゃないか。」

「大丈夫。ほつといて逃げましょ。」

「でも、死んじゃうかも。」

「こじつはこのくらいじゃ死なないわ。さあ早く。意識が戻らないうちに逃げるのよ。」

キヤサリンに手を引かれて、モーテルから逃げ出した。

「でもあなた、すごいのね。あのボビーを一発でのしちゃうなんて。」

「いやいや、あれはたまたま俺が足元に転がって、あいつが勝手につまづいて転んで頭をぶつけただけだ。そうでなかつたら、今頃俺はハツ裂きにされてるよ。」

「ふうん。日本人はやっぱ奥ゆかしいのね。」

キヤサリンは俺が意識的にやつたと思っているらしい。冗談じゃない、あんなゴッソイ奴、武器を使つたつて勝てるもんか。

「でもどうしてキヤサリンはボビーに追われてるんだ？」

「追われるわけじゃないのよ。あいつ、あたしのことが気に入ってるみたいで、俺の女になれつてしまつこいのよ。あたしが他の男と居ると、いつも邪魔をしに来る。今日だって、別にあいつの女でも何でもないのにドアまで壊して入つて来たでしょ？まったく迷惑だつたらありやしない。」

「あれは邪魔というより、殺されるところだったよ。」

「ああ、何人かはあたしの知らないところで殺されてると思つわよ。あいつつてそういう奴だもの。」

「ちょっと待つて。じゃ、俺、今度見つかつたら殺されない？」

「大丈夫よ、あなたはあれだけ強いんだもの。でも、銃には気をつけたほうがいいわね。いくらトオルでも銃にはかなわないわ。」

「俺、どうしよう…。」

「とりあえずあたしのところに来るといいわ。服も買つてあげる。

好きなだけ居ていこうわよ。」

いや、そういうことじゃないんだけどな。

泊まる所の心配をしてるんじゃなくて、命の心配をしてるんだ。キヤサリンは妙に二口二口して俺の腕にぶらさがっているけど、こりゃあ早く日本に帰っちゃった方がいいかな。

あ！パスポート！

パスポートを部屋に置いたまま逃げて来ちゃった！

翌日、こつそりとモーテルに戻つてみた。パスポートだけは失くすわけにはいかない。

ボビーの手下とかが居るかも知れないから、慎重にしなきやな。少し離れたところから覗いてみると、ボビーの手下らしい奴はいなかつたが、代わりに警察が居た。

俺が泊まっていた部屋の周りには黄色いテープが張り巡らしてある。やつぱりボビーはあのまま死んだのか？

だとしたら、俺、人殺し？しかも逃亡犯？

少し近づいて、集まっていた野次馬に聞いたみた。

「何かあつたの？」

「夜中に争うような声がして、朝になつたらドアが壊れて中の荷物も人も居なくなつてたらしいよ。カーペットに大量の血痕があつたつて。泊まり客は日本人らしいって言つから、強盗にでもあつたのかねえ。」

やれやれ、俺、知らない間に事件に巻き込まれてる。

キヤサリンの部屋に帰つて、今聞いてきたことを話した。

「今ちようどローカルニュースでやつてたわよ。荷物もボビーの死体もなくなつてたつて事は、きっとボビーの手下が片付けたのね。」

“死体”つて。死んでることに決めてるじゃないか。

「うそうそ。ボビーがあれくらいのことで死ぬわけないじゃない。それより、今頃きつとボビーの手下達が血まなこになつてトオルを探してるわよ。」

「だろうなあ。捕まる前に早く日本に帰りたいんだけど、パスポートも荷物ごと持つていかれたらしい。」

「今頃もう売り飛ばされてるわよ。日本人のパスポートは高く売れるからね。」

「じゃあ日本領事館に行つて一時渡航証明書をもらつてくるしかないかなあ。ダウンタウンの方にあるんだつけ？」

「私にはよく分からぬわ。でも、今行つたらまずいんじやない？」

「多分もう事件のことは伝わつてゐるだらうから、根掘り葉掘り聞かれ るわよ。」

「それもそだな。じゃあ、どうしたらしいかなあ・・・。」

「ほどぼりが冷めるまでここに居ればいいのよ。大丈夫、奴ら、バカだから見つかりっこないわよ。」

ところがボビーについて詳しい話を聞いて震え上がった。

ハリウッドを一分する大ギャング団のボスで、子分は数百人もいるらしい。いわゆる武闘派で、あちこちでいさかいや抗争を起こしている。

銃やナイフなんて当たり前だし、手下には人を殺すことなんて何とも思つてないような奴がこうじろしているといつ。

ボビー自体は刑務所に入ったことはないが、それも身代わりを立てているというもつぱらの噂で、今ではボビーのために代わりに手を下すという奴が何人もいるらしい。

どうしよう。

そんな奴に睨まれちゃつたのか。見つかつたら即さうわれて海にでも沈められちゃうのかな。

「やつぱり俺、日本に帰る。」

「無理よ。ちょっと時間を置かなきや。それに、日本領事館の周り だつてボビーの手下が張つてゐるかも知れないじゃない？」

「じゃあ、他の州に逃げる。」

「お金もないのに?」

「貸してくれよ。」

「お断り。ここに居るんならいいけど、お金を貸したらいなくなつちやうんでしょ?ねえ、ここに居てよ。」

考えてみたら他の州に行つたところで金もなければ住む所もない。

大体、パスポートがなければどうせ身動きは取れない。

ビザなしで来てるけど、三ヶ月までは居られるはずだ。ほとぼりが冷めるのを待つて領事館に一時渡航許可証つてのを取りに行こう。後は、日本に電話をして何とかして金を送つてもらうか。それまでには、ヒモみたいで気が進まないけどキャサリンの世話になろう。

キヤサリンはかなりいいマンションに住んでいた。ハリウッド大通りからほど近い七階建てのマンションで、オートロックのセキュリティつきだ。部屋は広い 1LDK で、中は白を基調としたセンスのいい家具でまとめられている。ここなら街に出るにもすぐだし、かといって大通りの喧騒は聞こえない。住民も裕福そうな人が多い。彼女が何の仕事をしているのか分からぬが、普段は殆ど家に居る。夜時々電話がかかってきて、そこ話をしているが、早口なので俺には分からぬ。暮らし向きは結構余裕があるようだが、表に出ないで出来る仕事つて一体何だろう。

その日は珍しくキヤサリンが外出した。

普段彼女が外出している時は、俺は見ても分からぬテレビを流しながらボーッとしているのだが、もうあれから十日くらい経つからそれにも飽きていた。

あれ以来何事もないし、この広いロサンゼルスで俺一人を見つけるのもそう簡単ではないだろう。俺は日本人観光客だし、もつ日本に帰つたと思っているかも知れない。

俺は出かけてみることにした。ハリウッド大通りを越えて南側に十分ほど歩けばバス通りがある。そこからサンタモニカ行きのバスに乗つた。ここまで来つていてサンタモニカを見ない手はない。平日の昼間なのでバスは空いていた。

窓側に座つた俺は外の景色を見ながらのんびりとバスに揺られていた。

何となく周りの景色が開けてくる。道路際にはやしの木が植えられ、空も何となく抜けているような感じだ。

バスを降りてみると、ハリウッドとは気温が数度違うのだろう、海風とあいまつて涼しく爽やかだ。空はどこまでも青く、街の景色も

色鮮やかに感じる。歩く人々も心なしか軽い足取りに見える。

バス停から半ブロックほど歩くと有名なサンタモニカの桟橋がある。当たり前だが、テレビで見たのと同じだ。写真を撮りたいところだつたが、スーツケースごと失くした俺は当然カメラも持っていないかつた。桟橋の横からビーチへと降りていった。

それにしてもこここのビーチは広い。海岸線に沿って南北に伸びてゐる長さもすごいのだが、波打ち際から砂浜が切れるところまでの幅がすごいのだ。つまり、縦横ともに日本のビーチとはスケールが違う。

砂浜の真ん中に自転車道路がある。自転車だけでなくローラースケートに乗っている人も沢山居て、まさに西海岸のイメージだ。本來なら俺もこういうことを楽しんで、今頃は日本に帰っているはずだったのに。

やっと海の側まで来た俺は、その辺にタオルを置いて、とりあえず海に足をつけてみた。

うわ、冷たい。これは泳ぐのは無理かなあ。まあいい、オイルを塗つて甲羅干しすることにしてよう。

波の音を聞いているうちに、いつの間にかうとうとしていたらしい。時計を見ると一時間くらい経つていて。ちょっとお腹も空いてきた。どこかその辺で軽く食べて、そろそろ帰ろう。キヤサリンも帰つてくるかも知れない。

海から街へは本当に近い。来た道、つまりバス通りを確認しながらサンタモニカの街に出た。

レストランは沢山あるけれど、それほどしつかり食べたいわけじゃない。コーヒーとホットドッグくらいで十分だ。

テラス席がある小さなカフェを見つけると、そこに入つてみた。それほど高くもなさそうだ。キヤサリンにもらつていたから金はあつ

たが、何となく人からもらつた金で遊ぶのは気が引ける。

コーヒーはやはり薄かつたが、ハーフでオーダーしたサンドイッチは結構いた。軽く流れるサーフミュージックと潮風、久し振りに観光気分を満喫できた。

ちょっと気分が軽くなつた帰り道、俺はバス停でバスが来るのを待つていた。それ程多くの人が乗るわけではない。俺と一緒に待っているのは数人と言うところだった。

と、目の前に、スマートガラスのカマロが止まつた。何だか嫌な感じだ。

続いて何台かのちょっと古いアメ車がそのカマロに前後して止まつた。

車から何人かの男が降りてくる。うわあ、やばい。俺は逃げる間もなく囲まれていた。

「ボビーがあんたに会いたがってる。一緒に来てくれ。」  
はあー、やっぱり。

言葉は普通だが、全身から殺氣があふれている。絶対に銃かナイフを隠し持つていそうだ。

逆らつたらこの場での仕行きだろ？

「わかった。」

俺は古いアメ車の後部座席に押し込められた。七十年代くらいのリンクカーんだろうか、全体に四角くて、とにかくでかい。作りがゴツくて戦車のようだ。今の日本車なんかとぶつかつたら日本車は一瞬で鉄クズだな。

当然のように俺の横にも一人乗ってきた。見張りみたいなもんだ。運転手席と助手席と俺の横に一人。揃いも揃って全身タトゥーだらけだ。よくもこれだけ悪そうな奴らが集まつたもんだと思ったが、類は友を呼ぶという言葉もあるし、恐らく他の車に乗っている連中も似たりよつたりだろう。

俺は一体これからどんな目にあうのか。

そんなことを考えているうちに頭が真っ白になつた。周りの景色もまったく目に入らない。

気がついたらいつの間にかタバコを吸っていた。そういうえば、俺は緊張すると無意識にタバコを吸う癖がある。

車は方向的にはハリウッドの方に向かっているようだ。だが、初めてのことなので正確には全然わからない。妙に安全運転のがかえつて恐怖をそそるが、途中からどんどんと寂れたエリアに入つていく。

やがて着いたところは殺風景としか言いようのないところだつた。緑などは一つもなく、ボロボロという言葉がぴったりの家ばかりが

並んでいる。五軒に一軒は廃屋のように見える。舗装も荒れて道路もボ「ボ」だ。こんなところは夜はもちろん、昼間だって歩きたくない。心なしか空氣までが埃っぽいような気がする。

車はその中の一軒の家の前で止まった。どうやらここが目的地らしい。

「さあ、ボビーがお待ちかねだ。」

ああ、俺の人生もこれまでか。お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許しください。

「お前たち、手荒な真似はしなかつただろうな。」

ボビーは手下たちをじろりと見て言った。あの時は一瞬だったのそれほどちゃんと見ていなかつたが、こうして明るいところで見ると、人間つてこんなに凶悪な顔になれるものかと思うほど怖い顔だつた。

「ああ、何もしてないよ。黙つてついてきた。落ち着いたもんさ。」

落ち着いていたんじゃなくて、恐ろしくて何もできなかつただけだ。「でもこいつ、大したもんだよ。車の中で俺たちに囲まれても、平気でタバコ吸つていやがった。」

いや、あれは無意識に吸つただけだから。何も考える力がなくなつて、周りが見えていなかつたの。

「そうか、大したもんだな。」

待つて。誤解しないでくれ。それじゃ俺、ふてぶてしい奴みたいじやないか。今すぐに泣いて謝っちゃおうか。それでも許してはくれないだろうな。

俺はボビーと向かい合つたソファに座らされた。体に力が入らない。どうせつと座り込んだ。

「よう、久し振りだな。あんたに会いたかつたよ。」

俺は出来ることなら一度と会いたくなかった。

「この傷を見ててくれ。あんたにやられた傷だよ。」

ボビーは左の額にある大きな傷を指差した。

それは、あんたが自分で転んでつけた傷だろ？俺は何もしちゃいない。いや、むしろ夜中に襲われた俺の方こそ文句を言いたいところだが、とてもじゃないが言えない。

「俺はあんなにあつさつやられたのは初めてだ。あんた、腕が立つな。」

だから勘違いだって。どうしてみんなこうなんだ？

「それで、わざわざ今田来てもらつたのはだな、どうだ、俺たちの仲間にならないか。」

仲間って・・・俺に、ギャングの仲間になれと？無理！絶対無理！俺はそういうタイプじゃないし、そもそも俺は日本に帰らなきやならない。

「どうした？何で黙ってる？気に入らないのか？分かった。あんたほどの腕があれば無理もない。なら、俺と五分の兄弟でビーフだ？本当は最初からその積りだったんだ。」

「冗談じゃない！こんな奴と兄弟なんかになれるか！何とかしなきや。俺は思い切つて言つてみた。

「もし断つたらどうなる？」

「そしたらあんたにはここで死んでもらわなきやならない。そういうと示しがつかない。」

死ぬか、こいつと兄弟になるか。できれば他の選択肢も欲しかった。

「遅かったわね。どこに行つてたの？」

「ああ、ちょっとボビーの所へ。」

「はあ！？あなた、何言ってんの？」

俺はボビーの所に行つてからの一部始終を話した。途端にキャサリンは笑い出した。

「あはは。あのボビーがねえ。よっぽどあなたにやられたのがショックだったのね。でもすげーじゃない。これで、ハリウッドの半分はあなたのものよ。もう表を歩く時に回りに気を配らなくていいし。」

「じゃ、俺、日本に帰れるかな？」

「ああ、多分それは無理ね。きっとあなた、見えないところにボディガードがついてるわよ。おかしな動きをしたら、すぐボビーのところに連絡が行くわ。」

それじゃ、ボディガードじゃなくて監視役じゃないか。

「それに、近々ロミオのことひとつ一戦交えるつて噂だから、手はいくらあっても足りないわ。きっとあなたも呼び出される。あなたくらい腕が立つ男なら、すごい戦力だものね。」

「ロミオとは？」

「ああ、ボビーとあなたがハリウッドの半分を持つてているとしたら、後の半分を仕切っている男よ。元々は移民の子らしいんだけど、この数年で小さなグループをどんどん吸収して力をつけてきたわ。これまでボビーとはぶつからないようにしていったけど、最近縄張りを広げようとちよつかいを出してきてるみたいなの。ボビーも決着をつける気でいるみたいよ。」

参った。命を狙われているかと思つたらギャングの親玉と兄弟分になつて、今度は抗争か。俺、普通の人間なのに。なんでこんなこと

になつちゃつたんだね。神様つてのがいるとしたら、俺の運命で遊んでないか？

ボビーと兄弟になつたことの効果はすごかつた。

ハリウッドの街を歩いていても悪そうな奴は皆挨拶してくるし、道を開けてくれる。レストランやカフェで飲み食いしても請求書が来ないどころか、注文していないものまでどんどん出てくる。ギフトショップや洋服屋は自分の店に寄つて行つてくれとうるさいし、靴や着るものも沢山プレゼントしてくれる。たまたま小さな揉め事がある所に出くわすと、俺の顔を見ただけで逃げて行く。いさかいの仲裁も何度も頼まれたし、余所者が暴れていたりしたらその対応にも呼ばれた。もちろん、その時は俺の「ボディガード」がどこからともなく現れてすべて片付けた。

何だか自分が強くて偉い人間のようでちょっとだけ気分がよかつたが、でもそれは俺の力じゃない。周りの奴らが勝手に勘違いして俺を祭り上げてるだけで、本当のところは俺は何もしていないし、第一、俺は強くとも何ともない。分不相応な待遇でかえつてむずかゆい感じだったし、ここで偉そうにしてしまうと、いざ化けの皮が剥がれた時にどんな目に合つか分からぬ。

俺の目に見える範囲にボビーの手下が顔を見せないことがせめてもの救いだった。どこに行つても金を払わせてもらえないのはしじうがないとして、せめて偉ぶらないでいよう。

ズルをしていい目を見ていいよつた、半ば後ろめたい気持ちのまま二週間ほどが過ぎた。

ボビーがくれた携帯電話が久し振りに鳴つた。

「今週の金曜日、ちよつとしたイベントをやるからトオルも来てく

れ。」

ボビーの声だつた。

「夜九時じろに迎えの車をやるから。じゃあな、兄弟。」

来た。とつとう来た。イベントなんて言つてゐるけど、絶対嘘だ。口

ミオとの抗争に違ひない。

金曜日と言つたら明々後日じやないか。どうしよう。どうしよう。

そんなところに行つたら、俺、死んじやうよ。

不安な気持ちのまま金曜日が來た。

キヤサリンのマンションの前に、見たことのある古いリンカーンが止まつた。

「銃にだけは気をつけてね。」

キヤサリンはあつさりと送り出してくれたが、どうやって銃に気をつけるというんだ。

大体、俺は本物の銃を見たことすらない。もちろん、弾の避け方も知らない。

そんな俺の気持ちを知つてか知らずか、運転手は無言のまま車を出した。ひょっとしてこいつも緊張しているのか。

車は二十分ほど走つて古い工場跡のようなどこにつけた。暗かつたし道には詳しくないので正確にはどのあたりかわからない。しかし、よくこんなところを見つけたなと思うくらい、大人数がこつそり集まるのにぴつたりの場所だつた。

中に入つてみると、数百人というのは大げさとしても、一百人近くは居るだろう。こんな沢山の人数で抗争をやるのか。話し声一つしないのがかえつて不気味だつた。

俺は前の方に通され、その集団と向かい合つて立つた。隣でボビーがにやりと笑つた。

「さて、トオルも来てくれた事だし、今日の作戦を説明する。幹部は集まつてくれ。」

十数人が前に出てきた。

「いいか、知つての通り、フランクリン通りの倉庫にロミオのチームが今日集まることになつてゐる。どうせうちを潰すとかそういう相談に決まつてゐる。奴らが来る前にこっちから出かけていつて一気に叩き潰す。段取りは、マイク、お前が説明しろ。」

「作戦は簡単だ。奴らが集まる倉庫には表口と裏口がある。チームを三分の一と三分の一の二つに分けて、三分の一の方が表口から襲い掛かつて騒ぎを起しす。奴らの気をそつちに引き付けてから、裏から残りの三分の一が突入して一気に挟み撃ちにする。」

マイクと呼ばれる男は参謀なのだろうか。それにしてもあまりにも単純な作戦だ。そんなことで本当に成功するのか？それより、今日のことは向こう側には漏れていかないのだろうか。

心配する俺をよそに、ボビーが号令をかけた。

「よし、それじゃ行くぞ！」

俺たちは何台もの車に分乗して、時間差で出発した。沢山の車が一気に押しかけるのはまずい。中には金属バットや棒のようなものを手にしている奴もいるが、半分は手ぶらだ。きっとポケットにナイフや銃を隠し持つてゐるに違いない。

俺はボビーの車に乗せられた。俺もボビーもほとんど口を開かなかつた。タバコばかり吸つていた。

現場近くなると、いつの間に指示したのがごく自然に一手に分かれていいく。

俺とボビーは表口の方に居た。

ロミオ達の居る倉庫からは見えない位置に車を止めて集まつた。

「よし、じゃあ、まず一人が車で表口をあおる。注意を引きつけたところで一気に襲い掛かる。その方が騒ぎが大きくなるし、総攻撃をかけているように見えるから、挟み撃ちの効果が上がるだろ。誰かその役をやりたい奴はいるか？」

ボビーが周りの奴らの顔を見回すが、なかなか誰も名乗り出ない。

「俺が行くよ。」

俺は自分から手を挙げた。

皆一瞬びっくりしたような顔をしたが、考えてみたら車であるだけだから、一番危険が少ないじゃないか。一度あおって、皆が襲い掛かつたら一番後ろに隠れていればいい。

「皆、聞いたか。さすが俺の兄弟分のトオルだ。一番危ない役に自分が名乗り出てくれた。やっぱりこいつは大した男だぜ。」  
え？ ちょっと待って。この役、危ないの？ 俺、もしかしてどんでもない勘違いしてた？

今さら挙げた手を下ろすわけにはいかなかつた。

「よし、じゃあ、このカマロを使つてくれ。カリカリに改造してあるから馬力がある。なに、奴らの目の前で一発スピントーンでも決めてやれば腰を抜かすさ。」

スピントーンなんてできないって。

「トオル、これを持つて行け。」

ボビーが銃を取り出した。

「いや、要らない。」

持つて行つたとしても、俺は銃の撃ち方を知らない。

それより、どうしようか。倉庫の前まで行つてクラクションを二、三回鳴らして逃げてしまおうか。この車は馬力があると言つから、結構スピードも出るだろう。そのまま真っ直ぐ走つていけばいい。  
そうだ、そうしよう。

ボビーが携帯電話で連絡を取つてゐる。これからトオルが一番で切

り込んで、すぐに既に轟きを起します。始まつて五分位したら裏から突っ込めとか言つている。

「よし、じゃあトオル、頼む。」

俺は半ばあきらめた。もう行くしかない。行つて、何とか一番目立たないところに逃げ込もう。

エンジンをかけて、ライトをつける。アクセルを踏み込む。もののすゞい音をたててホイールスピンする。おお、確かにすゞいパワーだわ。でも、こんなに大きな音を立てたらやばいよ。田立つちやう。

少しアクセルを緩めると、車は走り出した。しかし、まだパワーが余つていて、後輪側を左右に振りながら進んでいく。やばい、見張りに見つかったらしい。こっちを向いて何か叫んでいる。早いところ通り過ぎなきや。

うわ、いきなり銃を撃つてきた。そんなのありか？ 当たつたら死んじゃうぞ。

俺は頭を下げるよつとして何とか車を走らせた。止まつたらお終いだ。早く通り過ぎますよつに。心臓がドキドキしていた。車にガクンと衝撃が走つた。何だ？ ハンドルが取られる。まずい、コントロールが利かない！ タイヤを打ち抜かれたのか？ うわああああ！

車はそのままどこかに激突し、俺は氣を失つた。

どれくらい気を失っていたんだろう。時間の感覚がない。

その前に、ここはどこだ？

起き上がろうとして、自分が車のハンドルの下にしづくまつっていたのが分かった。

ぶつかつた衝撃なのか、変な体勢でいたからなのか、体がちょっと痛かった。

何とか車から這い出てみると、どうやら俺が通り過ぎようとした倉庫の中らしい。

表が見えないまま走っていてコントロールを失って、そのまま倉庫に突っ込んだようだ。

何やらきな臭い匂いがする。後ろを見てみると火の手が上がった。

誰かが火を付けたのか？襲撃はどうなったんだ？

それより、まずここを出なくちゃ。

「うう・・・。」

うめき声が聞こえた。誰かいるのか。

声がした方に目を凝らしてみると、誰かが倒れている。

「おい、しつかりしる。早く逃げないと焼け死ぬぞ。」

俺は男に声を掛け、助け起こそうとした。

「足が挟まつて抜けないんだ。」

鉄骨か何かの下敷きになつているらしい。

俺は近くから鉄の棒を見つけると、てこの原理で鉄骨を起した。

「さあ、早く抜け。」

「助かつた。感謝する。」

「よし、逃げるぞ。俺の肩につかまれ。」

俺たちはふらふらと出口へ向かった。

「おお、トオルだ。トオルが出てきたぞ！」

誰かが叫んだ。どうやら仲間らしい。

「トオル、大丈夫だつたか。お、血が出てるじゃないか。どこか怪我は？」

「俺は大丈夫だ。それよりこいつを。足が折れてるかも知れん。」

「わかった。おい、しつかりしろ。あれ、こいつ、ロミオだ！おいみんな、トオルがロミオを生け捕りにしてきたぞ！」

ロミオって、相手方の大将じやないか。

どうやらロミオの足は折れてはいないようだったが、その代わりに手足を縛られて車のトランクに押し込められた。

俺たちはボビーの家へと戻った。

途中、ボビーが、俺が気を失っている間のことを話してくれた。

「まったくトオルは無茶するよな。奴らをあおつて注意を引き付けるだけでよかつたのに、あの銃弾の雨の中をそのまま倉庫に車ごと突っ込んでいくし。奴らも慌てただろうけど、俺たちも焦つたぜ。急いで倉庫に飛び込んでみるとトオルはもう居ない。一人で切り込んで行くなんて信じられないよ。だが、おかげで襲撃は大成功だ。おまけにトオルはロミオまで捕まえてくれた。まったく今回の成功は全部あんたのおかげだよ。見ろ、あんたに不信感を持つてた奴らもすっかりあんたに参つちまつたようだ。ま、カマロは潰れちまつたけど、あんたにはキヤデラックでも用意しなきゃならないな。防弾ガラスの。」

ボビーはそう言つと大笑いした。

なるほど、そういう事があつたのか。なんて、納得してゐる場合じゃない。命が助かつたからいいようなものの、ちょっと間違えたらあの世行きだつた。危ない危ない。もうこんな抗争とかはごめんだな。

「ところでのカマロ、あの倉庫に置いてきたままだけど大丈夫なのか？」

「ああ、やうだな。じゃあ、トオルからキャサリンに一言言つとこ  
てくれよ。」

「キャサリンに? 何でキャサリンに言つんだ?」

「何でつて、お前、ひょっとして知らないのか? まあ、言つといて  
くればキャサリンがつまへやつてくれるよ。詳しへは直接聞いた  
ほつがいい。」

ボビーの家に着くと、ロミオが縛られたままビデオに引っ立て  
られてきた。

「さて、どう痛めつけてやるうか。」

ボビーが凶悪な目で睨みつける。

俺は口を挟んだ。

「もう勝敗は着いてる。血生臭い」とはやめてくれ。」

「しかしなあ、トオル、こいつはこれまで散々俺にたてついてきた  
奴なんだ。きつちりけじめをつけないと示しがつかない。」

その時、ロミオが口を開いた。

「待て。俺は殺されても仕方ないが、ちょっと俺の話を聞いてくれ。」

「命<いのい>なら聞かん。」

「そうじゃない。ちょっとだけ、その男……トオルって言つのか、  
トオルに話をさせてくれ。」

「・・・話を見に。」

「このまま放つておいたらこの男は殺される。いくら何でも田の前でそれを見たらさすがに寝覚めが悪い。

「あんたみたいな滅茶苦茶な男は初めて見たよ。今回はあんた一人にやられたようなもんだ。でもあんたは俺を助けてくれた。あのままだつたら焼け死んでいたところを、敵だつた俺の命を救ってくれた。あんたにはしびれた。かなわないと思ったよ。で、どうだ。あんたに救われた命だ、あんたのために使わせてくれないか。」

「俺のためにとは？」

「俺はあんたの下につくよ。あんたのために働く。」  
「いつ見ても俺もハリウッドの半分を仕切っていた男だ。役に立つぜ。」

「ちょっと待てよ。順番が違うんじゃないのか。」

ボビーが口を挟んだ。

「俺とトオルは五分の兄弟だ。ロミオ、お前がトオルの下につくという事は、俺の下につくということでもあるんだぞ。」

「勘違いするな、ボビー。俺はお前の下にはつかないよ。俺とお前の力はいい勝負だ。今回だつてトオルがいなかつたらどうなつていたか分からぬ。だけど、お前にだつて分かつているはずだ。トオルは、俺たちとは器が違つのさ。」

ボビーは黙り込み、しばらくたつてやつと口を開いた。

「わかった。俺もトオルとの杯を直して、トオルの下につくことにする。そしてロミオ、お前とは五分の兄弟になる。それでハリウッドはトオルの下に統一される。俺とお前もいつまでもいがみ合つているわけには行かない。このままじゃ共倒れだ。そうなつたら他の地域の奴らが一気にハリウッドに入り込んでくる。それだけは避けたい。」

ナイフが持つてこられ、それぞれが腕に軽く傷をつけて血を出す。傷口を付け合つて血を合わせて儀式は終了した。

「トオル、これであんたがハリウッドのトップだ。」

「よろしくな、トオル。」

いつの間にか話が進んでいた。俺が？ハリウッドのトップ？なんでそういう話に。俺なんか居なくたって、お前達一人でやって行けるだろう。だいたい、俺なんかが、お前達みたいな凶悪な奴らの上に立てるわけがないじゃないか。

言いたいことは山ほどあったが、思つた通りにしゃべれるほど英語がうまくはない。何も言えないまま既成事実として成立してしまつた。俺、どうなつちやうんだろ？。奴らの話から想像すると、他の地域のギヤングとかに狙われたりしないんだろうか。とりあえず、ボディガードを増やしてもらわなきゃ。

「無事に帰つてきたわね。安心したわ。」

俺の顔を見るとキャサリンはほつとした顔をした。

「で、どうだつたの？」

「うん、倉庫に車を置いてきたままだからようじくつてボビーが言った。」

「何、それ？」

「キャサリンに一言言つと大丈夫らしいよ。」

「あなた、話を端折り過ぎ。ちゃんと順を追つて話してよ。」

俺はゆつくりと順を追つて話した。ロミオを連れてきてからのがだりで、キャサリンは目を丸くした。

「あなた、すごいじゃない！今まで誰も出来なかつたハリウッド統一をやつてのけたのよ。これであなたはハリウッドの帝王つてことよ。さすが、私が見込んだ男ね。わかつたわ、車の事と倉庫の火事の事は何とかするわ。あなたは何も心配しなくていい。」

「何とかするつて、どうするんだ？」

「車は無かつたことにするし、倉庫の火事もホームレスの火の不始末か何かつて事にするわ。」

「そんなことが出来るのか？いつたいどうやって？」

「ハリウッドの警察のお偉いさんに知り合いがいるのよ。ちょっと頼めば何となるわ。」

いくらアメリカがいい加減な国だと言つても、そんなことが通用するものだろうか。

倉庫が火事になつて、銃弾の跡があつて、潰れた車が放置されているんだ。その車だつて、もしかしたら盗難車かも知れない。あの騒ぎを誰かが見ているかも知れない。

それを揉み消すなんて無茶だ。どんな知り合いか知らないが、簡単ではないだろ？

ひょつとして賄賂を積むのかな。それにしても結構な額が要るだろう。

それをこんなに簡単に言つてのける・・・キャサリンは一体何者なんだ？

それからの俺の生活は結構変わった。

まず、新車のキャデラックが来た。もちろん防弾ガラスだ。ボビー曰く、“車の下に爆弾を仕掛けられても大丈夫”くらいボディも強化してあるらしい。左ハンドルで右側通行にはまだ慣れないでの殆ど乗つていなければ。

あとは、俺名義の、クレジットカードとATMカードを兼ねたカードが来た。

もちろん俺は銀行口座なんて持つていなくて、単なる「旅行者」俺が持てるはずのものではない。これはロミオがくれた。銀行のATMで確認してみると、三十万ドルくらい入っていた。しかも、使つた分は自動的に補充されるらしい。

組織の方も落ち着いた。実際俺は何もしていなくて、ボビーとロミオの合議制でやっているようだが、結論が出ないときだけ俺に話がある。

ハリウッド内に居た小さなグループも次々に投降し、ハリウッド全體がほぼ一つにまとまつた。いくつかの近隣のギャングからも連絡があり、友好関係を結んだりした。

こう書くといい事のようだが、実際はどんな悪いことでもやる奴らがただ集まっているだけのこと、けして街が平和になつたわけではない。

一つだけ俺は組織に注文をつけた。それは、ドラッグを扱わないこと。

それを主たる収入源にしている奴らも沢山居たから、当然不満の声も上がつたが、俺は力ずくで押し切つた。と言つても実際押し切つたのはボビーとロミオだが。

俺達の組織は恐怖と暴力の上に成り立つてゐるわけで、それは十分

分かつっていた。人を泣かせることで収入を得ていると言つてもいい。日本のヤクザのように任侠なんて存在しないし、金さえもらえば自分の親でも手にかける、と言う奴がごろごろしている。まあ、そんな奴らはいつかどこかで殺されちゃうだろ？し、そうでなくとも刑務所に行くのが関の山だ。

だが、ドラッグをばびこらせたら一般の人達にまで売ることになるだろう。こいつらギャングが自分でやつて廃人になるのは自業自得だが、一般の人はそうではない。金だけでなく、その人の人生すべてを奪うことになる。いつか俺はここから逃げ出すだろうから、せめてそれまではドラッグフリーにしたかった。

そう言う感じで表向きは平和に暮らしていた俺だが、いまだにパスポートがなかつた。

帰りのチケットはとっくに期限切れになつていたが、それは金さえ払えば何とかなる。今の俺ならファーストクラスでも買える。

しかし、アメリカに来ている外国人にとって、身分を証明できるものは唯一パスポートだけなのだ。それがないともちろん日本への飛行機にも乗れないし、例えばアパートを借りようにも何も身分を証明するものがない。車の免許すら取れないのだ。

パスポートを取るために日本から贋本を送つてもらつたり、日本国領事館に行つて一時渡航許可証をもらう手もあつたが、俺は少しここの生活が気に入つてきていた。何しろ俺は日本に帰つたら失業者だ。ここに居たら、ちょっと怖いけれど、何もせずにぶらぶらしていられる。一切金の心配もしなくていい。将来のことは心配だけれど、とにかく楽なのだ。

そんなんある日、キヤサリンが話しかけてきた。

「ねえトオル、あなた、ずっとアメリカに居るんだつたら永住権取グリーンカードる？」

「グリーンカード？ 取れるもんなら取りたいけど、いろいろと難し

「いんだろ? 時間もかかるつていうし。」

「トオルがその気なら取つてあげるわよ。私、移民局にもちよつと顔が利くの。」

「ふうん。それなら任せるけど、大丈夫なの?俺、捕まつて強制送還とかにならない?」

「ならないわよ。この国の移民局はそんなに優秀じやないわ。」「書類とか、何を用意すればいいの?弁護士も探さなきゃならないだろう。」

「とりあえず何も要らないわ。申請用紙は私がもらつて来るから。書き方も私が教えてあげる。」

三日ほどしてキャサリンが永住権の申請用紙を持つてきた。厚みが全部で一センチくらいありそうな分厚い書類だつた。見た瞬間、これを書くだけで一ヶ月くらいかかるんじやないかと思つた。分からぬところはキャサリンが教えてくれるだらうからいいものの、これを自分でやつたとしたら、読むだけで一年くらいはかかるかも知れない。

「じゃあ、ここに名前と住所を書いて、一番下にサインして。」「俺は言われたとおりに書いた。

「これでいいわ。移民局に出しておくれね。一週間くらいで呼び出しがあると思うから。」

「はい? その分厚い書類は何だつたの?と言つたが、名前と住所とサインだけで永住権を申請出来るわけがない。それに一週間って・・・ありえない。」

ところが一週間後、本当に移民局から呼び出しが来た。  
そして、そこで俺はキャサリンの正体を知ることになる。

「さあ、行きましょうか。」

キヤサリンの赤いBMWに乗り込んだ俺達は、フリーウェイ101号線を南に向かつた。

ハリウッドエリアから外にはあまり行ったことがないが、今日は移民局に永住権<sup>グリーンカード</sup>の面接に行くために早起きをした。

キヤサリンは白いワンピースにゴールドのネットクレス、バッグも白に金のワンポイントだった。ふちの赤い大きなサングラスをして、見るからに涼しげだ。

俺は薄いブルーグレーのスーツを着ていた。さすがに移民局の面接にジーンズとTシャツで行くわけにも行かず、仕方がなく一着作つたのだ。

まだ通勤ラッシュの前なのだろう、フリーウェイは空いていて、二十分ほどでロサンゼルスのダウンタウンに着いた。近くの駐車場に車を停めて、移民局の建物に向かつて歩いた。

建物の前に着くと、まだ7時を過ぎたばかりだと言つのに沢山の人々が並んでいる。ラテン系が多いようだ。

「ちょっと早かつたかしらね。」

キヤサリンは時計を見ながら言った。確かに約束は七時半だから、あと十五分くらいはある。俺が列の後ろに並ぼうとするが、キヤサリンはさつさと入り口に向かつて歩いていく。

「おいおい、皆並んでるんだから俺達もちゃんと並ばないと。」

「いいのよ、あの人達は半分以上はこれから申請するために書類を出しに来た人達だから。それに、私達が行くところはあの人達が行くところとは違うの。お腹が空いてきたから、早く済ませちゃいましょうよ。」

キヤサリンはそう言つと、入り口に立つて警備員に言った。

「局長のミスター・ロバート・オーウォンに取り次いでくれるから。キヤサリンが来たと言つてくれれば分かるわ。」

五分後、俺達は移民局の局長室に通されていた。

「グッドモーニング、ロバート。ご機嫌いかが。」

「これはこれはマダム・ハリウッド。こんなむさ苦しことこひへようこそ。」

「今日はプライベートだから、その呼び名はやめてちょうだい。」  
マダムハリウッド？

「で、この男が君の言つていた“彼”かね？」

「そうよ。彼はいろんな意味で今のハリウッドになくてはならない男なの。だから、永住権を取りたいのよ。」

「わかつてるよ。他ならぬ君の頼みだ。最優先で手続きするよ。写真と指紋だけは置いてってくれ。写真室は三階、指紋は地下の一番奥の部屋だ。封筒に入れて受付に渡しておいてくれればいい。」

「わかつたわ。じゃ、よろしくお願ひね。」

キヤサリンはそれだけで席を立つた。

部屋を出る前に俺はロバートと握手する時、こう言われた。

「おめでとう。一週間もすれば、君は合法移民（ローカル）だ。」

写真と指紋を取つて受付に渡し、俺達は移民局の建物を出た。

「お腹が空いたわ。何か食べていきましょうよ。この先に、ブリトーの美味しい店があるの。」

着いた所はキヤサリンの白いワンピースには似つかわしくない、屋台に毛の生えたようなお世辞にも綺麗とは言えない店だった。店の看板には「Kosher Style」と書いてある。どんなスタイルなのかよく分からぬが、俺達が買ったブレックファスト・ブリトーはとにかくでかく、重かつた。縦横七センチ、長さは二十センチくらいもある。朝からこんなに食べられるものだろうか。なるほどアメリカ人は大きいわけだ。

空いている席に座ると、一口かじつてみた。

中にはスクランブルエッグ、ハム、玉ねぎ、ソーセージ、チーズ、メキシカンライスなどがぎっしり入っていて、トルティーヤの皮も一重になっている。これを全部食べられたら、胃はんは食べなくなるよさそうだ。

「驚いたでしょ。」

「ああ、こんなブリトーは見たことがない。しかも、美味しいよ、これ。」

「おまけに、安いのよ、こい。」

キヤサリンはコーラを飲みながら話した。俺は、このブリトーに炭酸を合わせるとひどい目に合いそうだったのでコーヒーにした。

「トルには話さなきやならないと思つてたんだけど。」

「うん？」

「私の仕事のこと。」

「ああ、それは興味があるな。さつき移民局の局長が言つていた“マダム・ハリウッド”のこととか。君は一体何者なのか、教えてくれよ。」

「短く言つとね、私は高級コールガール組織の経営者なの。」

「コールガール組織？」

「それも、一流の顧客を持つた、ね。私の顧客にはハリウッドの有力者とか、役人とか、有名な映画監督やプロデューサー、俳優なんかも沢山いるわ。ハリウッド警察の上の方は皆私の顧客だし、さつきの移民局の局長もそう。国會議員にも顧客がいるわ。もちろん私自身は体を売らないけど、ハリウッドにいる女の子達の中には、お金が欲しかったり、権力に近づきたかったり、チャンスが欲しかったりする子が沢山いるのよ。そういう子達と、立場があつておおっぴらに遊べない人達を結び付けてあげるのが私の仕事ね。パーティや接待に女の子を派遣することもあるわ。」

「なるほど、それで合点がいったよ。この間の車と火事の件といい、

今日の事といい、全部君の“力”ってわけだな。」

「そうよ。気に入らなかつた？」

「いや、大いに助かつたよ。ありがとう。と言つか、俺は最初の日から君に助けられてばかりだな。感謝してるよ。」

「ううん。あなたは私が見込んだ男だもの。ねえ、考えてみて。あなたがハリウッドの裏社会を仕切る帝王だとしたら、私はハリウッドの夜を司る女王つてところね。私達一人一緒なら、大概のことは出来るわ。」

「そうか、すごいな。」

「またそんな、他人事みたいに。」

「まあいいじゃないか。今まで結構普通に楽しくやつてるんだから、このままでいよつよ。わざわざ面倒を起こすこともないじゃないか。」

「まったくあなたらしいわね。」

俺達は声を合させて笑った。

永住権も無事に届き、俺は平和な毎日を過ぐしていた。

「永住権つて“グリーンカード”って言つたど、縁じやないんだね。」

「いつの時代の話？昔は緑色のカードだつたらしいけど、その後ピンク色とかになつて、今のカードになつたつて聞いたわ。」  
俺とキヤサリンはハリウッド大通りにあるカフェで遅い朝食を取つていた。

チャイニーズシアターから「ブロック西に行つたところにあるオーブンテラスの店だつた。

トーストにハツシュブラウン、卵を二個使つたオムレツとカリカリベーコン、それとコーヒー。絵に描いたようなアメリカの朝食だ。ポカポカとした陽気が心地よかつた。

食事を食べ終わり、コーヒーをおかわりしていくつろいでいた時のことだ。

目の前に一台の車が止まり、するすると窓が開いた。

「死ね！トオル！」

パン、パンと、何回か乾いた音が響く。

耳の横の方に焼けたような熱さを感じる。

キヤサリンの悲鳴が聞こえる。

鉄が焼けたような匂いがした。

男達が怒号を上げ、車とバイクが十台ほど飛び出していく。

「逃がすな！絶対に捕まえろ！」

誰かが叫ぶ。

一瞬何が起こつたか分からなかつた。

が、それもすぐにわかつた。俺は銃で撃たれたのだ。  
幸いにも俺の体には当たらなかつたようだ。

だが、キヤサリンは？俺のすぐ隣にいたキヤサリンは？

「キヤサリン。大丈夫か。」

「私は大丈夫。だけど、これを見て。」

キヤサリンのバッグが銃弾で撃ち抜かれていた。

ちょっとそれでいたら、キヤサリンに当たっていたかも知れない。

俺はともかく、彼女の命までが危ないところだつた。こんなことをする奴は許すわけにはいかない。

俺は頭に血が上るのを感じた。

最近は平和に暮らしていだし、このままでいいと思っていたが、やはり俺はそういう世界に身を置いているのだ。

俺達にこんな事をしたらどういうことになるか知らしめなければなるまい。

しばらくして、俺を撃つた車を追いかけていた奴らが帰ってきた。

「すまん、トオル。逃げられた。まだ何人があたりを探してる。」

「お前達、車種と色は覚えてるだろうな。ナンバーは見たか？」

「ナンバーは半分しか見えなかつた。でも、車種は覚えてる。」

「よし、お前ら、ボビーとロミオに言つて、三十分以内に全員を集めろ！一人残らず全員だ！」

俺達は警察が来る前にそこから離れた。

連絡を受けたボビーとロミオはすぐに俺達のところにやつて來た。

「トオル、大丈夫だつたか？」

「どこのどいつだ、こんなことしやがつたのは。」

「それは分からん。だが、俺はちょっとと考えが甘かつたようだ。うちは所帯もでかいし、こちらが侵略しなければ抗争になることはないと思つていたが、こんなことをされるんじゃあ、俺達に手を出したらどうということになるかきつちり見せてやらなきやならないだろう。」

やがて全員が集まつた。裏通りの駐車場とは言え、こんな街中で全

員が集まっていたら、遅かれ早かれ通報される。

ボビーとロミオが状況を説明し、さつき犯人を追いかけて行つた奴が車の特徴などを説明している。

いつもならそこで解散となるところだが、今回はあえて俺が皆の前に出て話した。

「いいか、お前達。何が何でもポリスより先に犯人を見つけて俺の前に連れて来い！この落とし前はきっちりつける。俺達に手を出したらどうということになるか、思い知らせてやれ！」

自分でもびっくりするほど大きな声が出た。よほど頭に血が上つていたのだろう。

そして俺の声より何倍も大きな、男達の叫び声が返ってきた。俺もとうとうこの世界に染まってしまった、そう思い知った。

三日後、情報屋と呼ばれる男が手がかりを持ってきた。

「トオルを襲つたのは、どうもバー・バンクの奴ららしい。奴ら、前からちょこちょことハリウッドに出てきてドラッグをさばいていたんだが、トオルが頭になつて以来ドラッグが売りさばけなくなつたもんだから、トオルを消そうとしたようだ。あわよくば、そのままハリウッドに入り込む気だぞ。」

「その情報は確かか?」

「ああ、奴ら、最近何だかきな臭い動きをしていたし、あちこちに飛ばした俺の“目”が確かめてきた。」

「よし、何人か人をやつて、間違いなかつたら犯人を特定してさらつて來い。」

「もう行つてる。」

しばらくして、問題の車を発見したと電話が入った。

「この車に間違いない。色も車種も年式も合つてゐるし、ナンバーの半分も一致する。乗つてる奴もバー・バンクのメンバーだ。」

「氣づかれるな。そいつが一人の時を狙つて、こつそりと連れて來い。ただし、絶対に殺すな。出来れば無傷で連れて來い。」

夜まで待つて、ようやく「そいつ」が連れてこられた。何發か殴られているようだが、それ以外は無傷のようだ。

「そいつ」は俺の前に手錠をかけられ、縄でグルグル巻きにされた姿で連れてこられた。ふて腐れたような表情をしていて、もう抵抗もしない。

「お前、名前は?」

「ヘンリーだ。」

あの時の声と重なり合つた。こいつで間違いない。

「お前、組織に命令されて俺を狙つたんだな。」

「いや、俺一人でやつたことだ。あんたを殺れば俺の名が上がると思った。」

「見え透いた嘘をつくな。お前みたいなチンピラがそんな事を出来るわけがない。」

「つるさい！いいから早く殺せ！」

チンピラの典型的な切れ方だ。強がっているが、内心ビビッているに違いない。俺はニヤリと笑つた。

「簡単に死ねると思うな。お前は俺の命を狙つたんだ。お前にはこれから死ぬより辛い目にあつてもらう。おい、こいつをしばらく監禁しどけ！」

男が連れ去られた後、こいつを出来るだけ傷つけないようこ、メシも食わせろと指示した。

ボビー やロミオからはすぐに始末しようと不満の声が上がったが無視した。

その間に、バーバンクの奴らを叩き潰す準備は着々と進んでいた。俺は、今回は作戦云々ではなく、正面から叩き潰すと宣言していた。そのためか、いつもより多くの銃が集まり、どこから手に入れたのかマシンガンまであった。

前回のロミオとの抗争以来始めての戦いとあって、臨氣合が入つてゐるようだ。

ヘンリーを捕まえたと言ひ噂を流しておいたから、バーバンクの奴らも同じように準備をしているに違いない。今回は力と力のぶつかり合いになる。

今回の抗争で、俺にはもう一つ目的があつた。

奴らがこれ以上ドラッグを扱えないようにするつもりなのだ。せつかくハリウッドからドラッグを追放したのに、他の地域の奴らに持ち込まれたのでは意味がない。

もちろんバー・バンクを潰したところですべてのドラッグを駆逐できるわけではないのは知っている。しかし、一つ一つでも潰していくば、そしてそれを外に示せば、ハリウッドには段々ドラッグが入つて来なくなるだろう。少なくとも一般市民には。

そのために情報屋に金を使わせた。

自分の“目”の他にも、他の地域の情報屋に金を渡して情報を買い集めさせたのだ。

その結果、面白いことが分かつた。

奴らはドラッグの工場と倉庫を持つているのだが、それらはそれぞれ街の端と端にあるのだ。

工場で精製して倉庫に保管する。運んでいる途中に見つかる可能性もあると思うのだが、どちらか一方が見つかった時でももう片方が生き残るという田論見なのだろう。

よし決まった。今回はこの両方を一度と使えなくする。

近隣の有効団体からも協力の申し出があった。

バー・バンクの奴らのやり方が気に食わないのだろう、結構な数が集まつてくる。

同様に向こうも他の団体を集めているかもしねれない。

と言うことは、今回の抗争は、ロサンゼルスの北側のギャングを真っ一ついに分けての戦いになると言つてい。

これだけ話が大きくなると、どこからか情報も漏れていくだろう。準備にあまり時間をかけるわけにはいかない。

いよいよ決行日が来た。今日の戦いは恐らく新聞でもテレビでもトップニュースになるだろう。それぐらい大きな戦いだ。ロサンゼルス暴動以来、こんなに大きな騒ぎはなかつたはずだ。

ボリスとやり合つて体力を消耗するのは出来るだけ避けたいので、キヤサリンに言つて警察の警戒を緩めにしておいてもらつた。その代わり、こちらからもちょっとした情報を渡しておいた。警察に借りを作りたくないし、キヤサリンの立場も悪くしたくない。

情報は集めるだけでなく、うまく使えば武器にもなる。

俺を狙つた奴の情報を集めた時のルートを使って、今度は逆に情報を流した。

今日俺達がバー・バンクを襲撃することは奴らに伝わっているはずだ。奴らもそれなりの準備をして待ち構えていることだろう。ただし、奴らには、バー・バンクには真ん中のアラメダ通りから入るということにしておいた。

もちろんこれは嘘だ。

今回の戦いは奴らの縄張りが戦場となるので、まともに行つては当然奴らに有利になる。

通りが広いアラメダなら信憑性があるし、奴らと正面衝突するにはうつてつけに見える。

しかし実際は北側のウェスト・ビクトリー通りから入る。

奴らが俺の流した情報を半分しか信じていなかつたとしても、わざわざ遠回りになるウェスト・ビクトリー通りを使うとは思わないだろ。

「トオル、そろそろ行こう!」  
ロミオが声を掛けてきた。

一瞬だけ迷った。

これまで何となく巻き込まれたり、向こうから仕掛けられた戦いだつた。だが、今回は初めて俺が自分から仕掛ける争いだ。この争いに行つてしまつたら、俺はもう普通の世界には戻れないかもしだれない。

今ならまだ引き返せる。引き返して日本に帰れば、あとは何事も無かつたかのように以前のような普通のサラリーマンに戻れるかもしれない。

ひょっとしたきつかけでこんな所まで来ちゃつたけれど、ここが分かれ目かも知れない。

しかし、もうどうにもならなかつた。

俺は声の限りに叫んだ。

「行くぞ！ 気合入れて行け！」

何十台もの車やバイクが、ハリウッドから一斉に北を目指す。地響きのような音を立てながら。表向きはちょっとスピードが出ている程度だが、どの車も定員一杯に乗り込み、武器を携えている。目立つなと言う方が無理だ。

バイク隊が先に出て交差点をふさぐ。

信号などお構いなしに全車両が列をなして進んでいく。その通り道は一時であるが俺達に蹂躪された。

バーバンクには予定通り、北側のビクトリー通りから入っていく。俺は皆に指示を出した。

「まず街の北側のドラッグ工場を叩く。徹底的に叩き潰せ！」

工場は街外れの使われていないビルの地下にあつた。今日の戦いに備えたのだろう、見張りが十人程度いるだけだ。

突然現れた大人数の俺達に、十人程度の見張りが抵抗するはずも無い。俺達の姿を見るとすぐに逃げ出した。恐らく本体に連絡するだろうから、すぐに奴らもこちら側に向かうことだろう。

工場のドアを叩き破ると、俺はまずいきなりマシンガンをぶつ放した。マガジンが空になるまで打ち続けた。それは、今までの生活に別れを告げる花火のようだつた。

あとは、とにかく一度と工場を使えないように、全部壊した。最後に火をつけた。これでここも終わりだ。

「よし、このままバー・バンクの奴らを叩くぞ！」

勢いに乗つた俺達は街の中心へと方向を変えた。

「トオル、街の反対側の倉庫はどうするんだ？ あそこも潰さないと、奴らはまたドラッグをさばき出すかも知れないぜ。」  
ボビーがたずねてきた。

「大丈夫だ。向こうの倉庫は今頃ポリスの手入れにあつてるよ。」  
そう、俺は今日のポリスの警備を緩くしてもらう代わりに、奴らのドラッグ倉庫の場所を警察に教えておいたのだ。

工場さえ潰してしまえばもうドラッグは精製できない。倉庫にあるものを警察に処理してもらえば、奴らのドラッグもお終いと言つわけだ。

そういう言つている間に奴らが集まつてゐる姿が見えてきた。予想外の方向から予想外の展開で俺達が現れたから、浮き足立つてゐるに違いない。

あとは本体さえ叩いてしまえばバー・バンクも壊滅となる。  
街に平和は来ないだろうが、少なくともこの辺のドラッグはなくな  
るだろう。

勝負はあつという間に決ついた。本当にあつせつとついた。

奴らはドラッグを売つてもいるが、自分達で打つていい奴も多いのだろう。そんなジャンキーどもに、組織化された俺達が負けるわけがない。

奴らのトップクラスの何人かは手足を縛つて転がしておいた。倉庫を片付けた後のポリスが拾いに来てくれるんだろう。

帰つてきて翌日、監禁していたバー・バンクのヘンリーを解放した。それも、まったくの無傷で。

俺を直接狙つた奴なので殺してしまえと言つ意見が多かつたが、俺は連中に諭した。

「考えてみろ。殺すのは簡単だが、あいつが俺達に捕まつたのはバー・バンクの奴らも知つていたはずだ。それが、無傷で帰るんだ、何があると思つのが普通だろう。バー・バンクに帰つても、ヘンリーは裏切り者と見なされる。放つておいてもバー・バンクの残党の奴らが始まつてくれよ。でなければ、ヘンリーはもうこの界隈には居られない。追つ手の影にビクビクしながら逃げ回つて暮らさうのさ。元の仲間にやられるか、一生ビクビクして暮らすか。それは死ぬより辛いだろう。俺を狙つて、キヤサリンを危ない目にあわせたんだ。簡単には死なせない。」

「あんなにキレたトオルは初めて見たつて皆言つてたわよ。」

俺はキヤサリンとドライブに出でていた。今日はメキシコのティファナ辺りまで行つてみようかと思つていてる。

「ああ、奴らは俺ばかりではなく、君まで危ない目に合わせたからね。それに、ドラッグを扱つてするのが気に入らなかつた。」

「どうしてそんなにドラッグを目の敵にするの？もちろん、ドラッ

グは良くないけどさ。」「

「うん、実はね・・・」

俺は親友の話をした。

奴とは中学高校とずっと仲が良かつた。

どちらかといふと俺は田立たない方、奴はいわゆる不良だったが、不思議とウマが合つた。

周りからはどうして俺達が仲がよいのか不思議がられていたが、結構いい奴だったのだ。

高校を出てからは別々の道に進んだので余り頻繁には会わなかつたが、ある時から奴の様子がおかしくなつた。

気づいた時には奴はドラッグ中毒になつていて、好奇心から手を出して、俺が気づいた時には自分の意思とは関係なく抜け出せなくなつていたのだ。

今でも奴は病院にいるが、廃人同様になつている。

親友を奪われたのもあるし、人間の尊厳そのものを奪うドラッグを俺は憎んだ。

もちろんただの会社員だった俺が日本で何か出来るわけではないが、今回はハリウッドの仲間達もいた。

「ふうん、そんなことがあつたんだ?」

「ああ、今でも、何でもつと早く気づいてやれなかつたのかと悔やんでるよ。」

「ねえ、国境の手前で車を停めて、メキシコに入つたらタクシーでエンセナダまで行きましょうよ。美味しいシーフードの店があるの。」

「

それからハリウッドに平和が来た。

と言いたかった。

ところが、自分で持つていた一線を超えてしまつた俺は、自分の居場所を見つけられなくて悶々としていた。

立場的にはハリウッドのトップだし、バーバンクも制圧したし、近

隣のギャング達とは友好関係にあるか、傘下に収めている。いわば、北口サンゼルスのトップと言つてもいい。

だけどそんな立場が俺にはむず痒かった。

今では街のどこにでも顔は利くし、金もいくらでも入つてくれる。困ることは何一つない。

だけど、基本的に俺は元々普通の会社員だったのだ。

それが、何の間違いかトントン拍子にこっちの世界で出世してしまつた。それも、たまたま旅行中のアメリカのハリウッドで。

俺に言わせれば、俺は迷子になっているようなものだ。ひょいと路地に入り込んでそのまま奥に進んでしまい、いつの間にか出口が分からなくなつてしまつた。自分が今どこにいるかもわからない。だけど何とかそこには居られるし、余り困つていない。

でも、本来自分が居るべきところから外れてしまつていて、元の世界で俺を知つている人達はどうしているのだろうか。

居心地のいいような、悪いような状態で、自分の意思と関係なく進んでしまつてているけれど、元の道にいつかは帰れるんだろうか。できればこれ以上迷路の奥には進みたくないんだが。

「トオル、青い奴ら（ベニスビーチ）から友好関係の申し出が来てるだ。

「まで、奴らは赤い奴ら（もう一つのベニスビーチ）との対立が激しくなつてゐるから、関わるとやばいぞ。」

「いや、赤い奴らは黒い奴ら（メキシコ系）とも最近組んでるようだし、青い奴らは元々卑怯な奴らだ。近づくなら赤い奴らの方がいい。」

「いつそ奴らの対立をあおつて、共倒れをせる手もあるぞ。やれやれ、また始まった。

俺はこれからどうに行つてしまつたのだろう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8355d/>

---

「ロスト・イン・ハリウッド」

2010年11月9日05時35分発行